

「家がいいね」 第46号

いせ在宅医療クリニック 広報月刊紙

2008.3.12

少しずつ風がぬるむ時期です。桜にはまだ早いですが、梅と桃は今が盛り、田の耕運も始まりました。ちょうど、6日は啓蟄(けいちつ)でした。



「榎山節考」以下の医療制度

4月から始まる予定の「後期高齢者医療制度」は、75歳を超えた人だけを強制加入させる悪法だと思えます。介護保険を使いにくくした改悪と同じく、「自己負担」と「保険使用制限」がセットされた制度は、高齢者のための医療とは程遠いものになるでしょう。保険制度は本来助け合いのために生まれた制度であり、充分助け合えない弱者だけをまとめるのは「切り捨て」の発想です。

深沢七郎の小説で映画化もされた「榎山節考」を思い出しましたが、これはむしろ人間愛です。

主人公のおりんは元気に働いていたが、今年榎山参りだった。七十歳を迎えた冬には皆、榎山へ行くのが、貧しく毎日の食に事欠く村の未来を守る為の掟であり、山の神を敬う村人の最高の信心であった。山へ行くことは死を意味し、おりんの夫、利平は母親の榎山参りを前に、心労に負ける行方不明となっていた。夏祭りの日、向う村から息子の辰平の後添の嫁が来た。安心したおりんは、年齢と相反した悩みのある丈夫な歯を自ら石臼に打ちつけて割った。晩秋、おりんは明日は山へ行くと告げる。夜が更け、しづる辰平を責めおりんは榎山参りの途についた。裏山を登り七谷を越えて榎山へ向う。その頂上は白骨と黒いカラスの禿げ山だ。気が付くと雪が舞っていた。別れ難い気持ちの辰平は猛然と山を降り「おっ母あ、雪が降ってきたよう。運がいいなあ、山へ行く日に」と叫ぶ。山に残ったおりんは黙って頷くのだった。

一人が生まれれば、一人が死に行く。人はお山参りの日まで限られた「生」を愛おしみ、気持が繋がってゆきます。今度の後期高齢者医療制度に、榎山のこの愛おしさがはたして有るのでしょうか。

「終わりよければ」いせの会 発足

3月13日(木) 19時 いせプラザにて。

認知症の人と家族の会 伊勢の集い

3月20日(木) 13時半~16時

外宮前 パルティいせにて。

「こころも凧りんと保て！」

自分の住むところには

自分で表札を出すにかぎる。

自分の寝泊まりする場所に他人がかけてくれる表札はいつもろくなことはない。

病院へ入院したら

病院の名札には石垣りん様と様が付いた。

旅館に泊っても

部屋の外に名前が出ないが

やがて焼場の鑪(かま)には「い」と

とじた扉のうえに

石垣りん殿と札が下がるだろう

そのとき私が「ばめるか？」

様も

殿も

付いてはいけない、

自分の住む所には

自分で表札をかけるに限る。

精神の在り場所も

ハタから表札をかけられてはならない

石垣りん

それでよい。

「表札など」昭和43年 所収

石垣りん(平成16年12月没)



自宅での人生を
最期まで支援します

〒516-0805
三重県伊勢市御園町高向 927
電話 0596-20-8104
ファクス 0596-20-8105
mail homecare@kr.tcp-ip.or.jp
<http://www.tcp-ip.or.jp/~takuro>

